

LNG 産消会議と GIIGNL 年次総会に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

10月6日と7日、広島において開催された LNG に関する2つの重要な国際会議に参加する機会を得た。10月6日には、第13回となる LNG 産消会議 2024 が、経済産業省と国際エネルギー機関の共催で開催された。東日本大震災後の日本で、原子力発電が停止し、電力供給とエネルギー安全保障のために LNG が一気に重要性を増す中、LNG の生産国・消費国の政府・民間企業等のハイレベル参加者が一堂に集う場として、2012年に始まったこの LNG 産消会議は、世界の LNG 問題を議論する重要なプラットフォームとしての位置をしっかりと確立している。今回の会合では、改めて官民対話を重視する、という観点において、後述する「LNG 輸入者国際グループ (GIIGNL)」と連携での開催となり、日曜日の朝8時からという開催においても多くの参加者を集めて、活発な議論が行われた。

10月7日には、LNG 輸入に関わる企業のトップや幹部が集う、GIIGNL の年次総会 (General Assembly) が開催された。「LNG 輸入者」の集まりといっても、実際には輸入に様々な形で関わるという面において、LNG 供給チェーンの上流から中流、そして下流に至るまで、様々なプレイヤーが参画しており、LNG ビジネスに関する主要なメンバーが一堂に揃う重要な会議である。今回の LNG 産消会議と、GIIGNL 年次総会は、共に昨年5月の G7 サミットが開催されたグランドプリンスホテル広島での開催となった。筆者は双方の会議に参加する機会を得て、世界の LNG 関係者の議論を興味深く聞くことができた。以下では、両方の会議への参加を通じて特に印象に残ったポイントを所感としてまとめたい。

第1には、双方の会議共に、LNG の重要性を強く意識し、かつそれを世界に向けて明確にアピールする姿勢がはっきりと表れたものであったことが印象深かった。一次エネルギー全体を見渡しても、過去半世紀にわたって、天然ガスは最も安定的に、かつ最大の増加量を持って拡大を続けてきた。そして、LNG はその天然ガスの国際貿易において、パイプライン貿易を凌駕する成長を続け、今や国際ガス貿易の主力となっている。このように重要な発展を続け、大きな役割を果たしてきた LNG であるが、ここ数年は、LNG の将来について、様々な課題が顕在化し、将来に対する不透明感が意識されるようになっていた、ともいえる。

特に脱炭素化の潮流が一気に加速化し、今世紀半ば頃でのネットゼロエミッション (NZE) 目標を掲げる国が次々と現れる中で、化石燃料の中ではクリーンとされる天然ガス・LNG も、やはり化石燃料である以上は、NZE 達成という「あるべき将来」の中で、その利用は急速に低下せざるを得ない、といった見方が様々なレベルで影響力を持つようになった。

しかし、特にウクライナ危機以降、世界のエネルギー問題を巡る議論には様々な変化が生じた。まずは、脱炭素化の重要性は不変であるが、暮らしや経済に不可欠なエネルギーの安全保障は、基本中の基本であり、これを蔑ろにすることはできない、という意識が世界的に高まることとなった。その中で、安定的で信頼に足るエネルギーの供給が重要であり、かつそれは、できるだけ手頃な価格で提供されることが重要という、ある意味では当たり前の考えが再び前面に出てくるようになった。

こうした状況下で、現在のエネルギーシステムを支える重要な化石燃料について、エネルギー転換が進むにせよそれには相当な時間が掛かるとすれば、今後もその重要性を改めて意識せざるを得ない、という流れが生じたともいえる。その中で、LNGの持つ意義が世界的に理解・意識される局面が多く見られるようになった。

また、今日の世界では、脱炭素化とエネルギー安全保障の両立を目指すエネルギー転換に向かい、高い「理想」を掲げて取り組みが進められるようになってきている。そのこと自体は大事であるが、暮らし・経済・雇用などの「現実」を踏まえなければならないことも先進国・途上国を問わず、世界の重要課題となっている。この状況下、冷徹な目で見るとその深刻化が理解できる「理想」と「現実」のギャップを勘案すれば、プラグマティックな選択としてのLNGの有効活用を図ることがエネルギー転換の成功に結果的には資することになる、との意識も広がりを見せるようになった、ということができるのである。

もちろん、エネルギー問題を巡る議論は複雑であり、様々な意見・見解が対立・対峙する関係にある。今日でも、「理想」の追求こそが最も重要であり、化石燃料からの転換・脱却の重要性を主張する意見・立場も様々な場で見ることができる。こうした意見が存在し、世界のエネルギー問題を巡る議論において一定の影響力を有していることもまた「現実」の一面である。

今でも、LNGの将来について、様々な課題があり、不確実性が存在していることは確かである。しかし、最近の国際エネルギー情勢の中で、大きな潮流として、エネルギー安全保障と脱炭素化の両立のためにはLNGが役割を果たすべき、あるいは果たすことが十分に可能である、という考えがモメンタムを持つようになった、と筆者は感じる。この点こそが今回の2つの会議の議論に参加して感じた最も印象的なポイントであった。

むしろ、2つの国際会議では、LNGが今後も重要な役割を果たしていき、エネルギーとして利用・選択され続けるためには、どのような課題を克服しなければならないか、という観点での、前向きな課題克服の議論が行われたようにも思われる。

例えば、LNGの安定供給を確保し、価格の競争力やアフォーダビリティを維持していくためには何が必要か、という点で、緊急時への対応能力強化に向けた議論や、安定供給のための国際協力の在り方とその具体化、などが様々な観点から議論され、合意形成も進められた。LNGの成長が特に期待されるのは新興・発展途上のアジアであり、アジアでのLNG市場の発展や拡大を支える要因は何か、についても様々な検討・議論が行われた。同時に、供給の安定と手頃な価格を実現していく上では、十分な供給の確保が必須であり、必要投資の実現に向けた課題もある。米国を中心としたLNG供給の拡大が予見される中、その実現に関する不確実性の存在にどう対処していくか、も取り組むべき課題とされた。

もう一つ、重要なポイントは、「LNG供給チェーン全体の脱炭素化」に向けた取り組みの必要性が強く意識された議論が行われたことである。LNGは確かに今後も重要な役割を果たしていくことが期待されている。その期待に応えるためにも、LNG供給チェーンに関わるステークホルダー自身が、自ら可能な限りの努力でLNGのクリーン化、脱炭素化に取り組むことが求められている。今回の会議では、そのための、様々な取り組み例や具体化の状況について、活発な議論が行われた。メタン排出対策、E-NG、CCS/CCUSなど、様々なオプションに関して、政策や制度の整備・技術開発・コスト削減・インフラ整備・国際協力など多様な面での取り組みを具体化していくことが求められて行くことになるだろう。世界のエネルギー転換の推進に貢献するためにも、LNGに関与する全てのステークホルダーによる今後の取り組みに期待したい。

以上